



# 第44回JLBCクイーンズオープン プリンスカップ

11月29日～12月2日  
品川プリンスホテルBC

## 霜出佳奈が歓喜の5年ぶり2勝目



▲「マッチゲームに苦手意識があった」というが、トーナメント方式のプリンスカップで歓喜の2勝目

予選8Gを投球し、プロ、アマそれぞれ48名ずつが決勝トーナメントに進出。2Gマッチのトーナメント戦・5回戦までを突破してベスト4に勝ち

残ったのは、宇山侑花、近藤菜帆、霜出、寺下智香の4名。その4名が準決勝シュートアウト1Gを行い、上位2目を優勝決定戦(1Gマッチ)に選出する。

今大会のパーフェクトは2個だったが、そのどちらも記録した宇山侑花をはじめ、1カ月前のジャパンオープンで初タイトルを獲得した近藤菜帆、リストアが禁止になる前のJPBA☆SSSカップで6勝目を挙げて以降タイトルから遠ざかっている寺下、今季3度の2位など、悔しさをかみしめてきた霜出の4名によるシュートアウトは、「右の21番レーンがすごく難しかった」と口をそろえた3人に対し、「自分がしっかり投げればストライクになると思えたので、自信を持っ



▲「自分が練習してきたことを出せた、いい投げ球ができました。また予選から決勝まで1個で通せたように、ボールも合っていました」

第44回を迎えたプリンスカップが、アマ140名、プロ96名が参加して盛大に開催されたが、前夜祭を優勝した霜出佳奈(50期・サンスクエアボウル/ハイ・スポーツ)が、その勢いのままに本大会でも頂点に駆け上がり、2018年のグリコセブンティーンアイス杯以来のタイトルで、念願の両眼を開けた。(主催：ジャパンレディーズボウリングクラブ(JLBC) 特別協賛：品川プリンスホテルボウリングセンター)



▲近藤は「今優勝にいちばん近いと言われていた佳奈プロの優勝が素直にうれしかった」と勝者を称えた



▲「難しいレーンにも、気持ち負けちゃいけない」と全力投球はしたんですけどね」と寺下



▲「自信のない投げ方をしてしまった。でも初のパーフェクトも達成できたので、いい大会になりました」と宇山

てゲームに入れた」霜出は、4フレでオープンを作ったものの、他はすべてストライクで261を打って勝ち抜けた。そして5フレからのフォースで223まで伸ばした近藤が続いた。

優勝決定戦は、ターキースタートで先行した霜出の4フレは②④⑧⑩のスプリット。「確実にテイクフリーを狙った」2投目は、本人も驚きの表情のピンアクションでスペア。対する

近藤の4フレは③⑥⑨⑩をカパーミスでオープンと、明暗を分けた。6フレは、残ったと思われた⑩ピンをメッセージャーが払うなど、ツキも味方に霜出が244:200で近藤を退け、遠かった2勝目をようやく手にした。

### 霜出のコメント

大事なところでたびたびジャスト⑩が出たり、なんてついていないんだろうと思っていたけど、あの1ゲームに今年1年分の福がきてくれた感じです。2勝目までは長かったです。心が折れそうなときも、同じハイ・スポーツと契約しているとくに男子プロに「いっぱい優勝する人は、いっぱい準優勝もするん

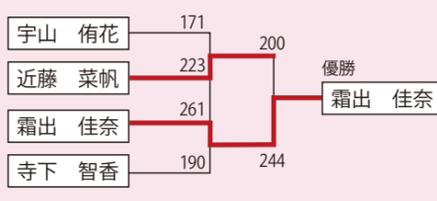
だから、あそこにいることが大切なんだ」と何度も言われて、準優勝も自分が頑張った結果と思うようにしました。マッチゲームに苦手意識があったので、トーナメント方式のプリンスカップを優勝できたのは、自信になります

優勝ボール: ROTOGRIP ジェム・クリスタル



▲ベストアマは総合19位の井崎寛菜選手(茨城・勝田パークボウル)

### ●準決勝シュートアウト・決勝



### ●優勝決定戦

霜出 佳奈	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	30	56	76	96	126	155	175	195	224	244
近藤 菜帆	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	20	40	56	64	93	113	132	150	170	200



## 第51回全日本選手権大会

11月18・19日 稲沢グランドボウル

### 男子 左投げの宮澤國彦選手が悲願の初V 女子 上地優子選手が9年ぶり3度目の戴冠



▲男女優勝者(©NBF/以下同)

日本ボウラーズ連盟(NBF/白石雅俊理事長)主催の今年度最終戦「第51回全日本ボウリン

グ選手権大会」が11月18・19日の両日、愛知県稲沢市の稲沢グランドボウルに40の都道府県連から男子467名、女子166名の選手が参加して開催された。競技は予選9G・準決勝3Gを経て男子20名、女子10名の上位者が決勝3Gを投球、計15Gトータルピンにて

覇を競った。混戦模様を呈した男子は、3位で決勝に進出した左投げの宮澤國彦選手(東京)が1G目260を打って抜け出し、トータル3178のスコアで大会初優勝。決勝で657をマークした高橋浩一選手(静岡/15G3097)が準決勝6位から2位まで順位を上げ、3位には早坂友伸選手(宮城/同3057)が続いた。ちなみに、2位の高橋選手も左投げ。サウスポーのワン



▲「初日の後半からラインを決めて投げたのが功を奏した。ようやく優勝できてうれしい」と宮澤選手



▲上地選手はハタBC、田町ハイレーン、そして稲沢と3回とも違う会場での全日本制覇。「平常心での投球を心がけました」とニコリ

ツーフィニッシュは、2010年の第38回大会以来13年ぶりのことだ。一方の女子も、決勝はゲームごとに順位が入れ替わる激戦となったが、631を打った上地優子選手(沖縄)がトータ

ル3153として14年の第42回大会以来9年ぶり3度目の全日本王座戴冠。2位は22ピン差の3131で渡辺麻央選手(愛知)、3位は3107の鈴木久美子選手(東京)と、歴代優勝者が上位を占めた。